



第24回「野生生物と交通」研究発表会のお知らせ

第24回「野生生物と交通」研究発表会を札幌市で開催いたします。野生生物と交通に関心を持つ多くの方のお申込み、ご参加をお待ちしております。詳しくは、ウェブサイト (<https://www.wildlife-traffic.jp/>) をご覧ください。



〈開催日〉2025年2月28日(金) 10:00(予定)～
〈会場〉札幌コンベンションセンター 中ホール
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

Zoomによる同時配信
(聴講のみ)

| 申込項目 | 参加費等 | お申込み締切 | お申込みはこちら |
|-------------|--------------|---------------|--------------|
| 会場聴講 | 無料 | 2025年2月14日(金) | |
| 懇親会(定員:50名) | 5,000円(予定) | 2025年2月14日(金) | |
| 講演論文集[事前予約] | 3,000円(当日販売) | 2025年2月14日(金) | |

※ウェブページの申込みフォームもご利用ください↑

オンライン聴講をご希望の方は、事前登録が必要です(無料)。登録方法につきましては、プログラム確定後にウェブページに掲載いたします。

お問合せ (一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会係(担当:鹿野・向井)
TEL:011-738-3364 FAX:011-738-1890 E-mail:wildlife@decnet.or.jp
ウェブサイト:<https://www.wildlife-traffic.jp/>



北海道のよりみちドライブ情報誌「Scenic Byway vol.34 夏秋号」

全道の道の駅等で配布中!

本号の特集テーマは、「ドライブ&描く」。北海道の厳しい冬、凍てつく寒さを感じながらも、その景色の美しさに圧倒される“冬”のドライブ。待ちわびた春の訪れ、植物も動物も生き生きと動き出すドラマチックな“春”のドライブ。本号は、冬の始まりから春の訪れまでの季節を楽しむ北海道の旅を“描く”をテーマに、ご紹介します。
「Scenic Byway vol.34冬春号」は、全道の道の駅等で配布中です。ぜひ、手に取ってご覧ください。



「Scenic Byway」のバックナンバーはこちらでご覧いただけます。→→
<https://www.scenicbyway.jp/goods/backnumber.html>

編集後記 10月24・25日に東京で行われた第50回全日本教育工学研究協議会全国大会に参加してきました。Next GIGA~創造性を育むICTを活用した新しい時代の教育を目指して~を大会テーマに、港区の4つの小中学校の公開授業の他、情報モラル、情報活用能力の育成や教科指導におけるICT活用など、様々な研究発表等が行われました。公開授業を見てまず一番思ったことは、自分が業務で関わっている小学校の授業と大きな違いはないということでした。(見ているものはごく一部ですが)ICTを活用した授業はもはや地域の差は関係なく、少なからずこれもICT研究の恩恵なのかと感じました。(R.W)



写真:今回授業を拝見させていただいた港区立小中一貫教育校 赤坂学園赤坂小学校。高層ビルが立ち並ぶ、まさにコンクリートジャングルの中にある学校でした!



dec monthly

2024.12.1 vol.471 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンズリートピック)
シーニックバイウェイ北海道 全道ルート交流会議

dec Interview >>> 根室市長 石垣 雅敏 氏



日本最東端の旅を誘う「知床ねむろ北太平洋シーニックバイウェイ」。その中心都市の根室市は「バードウォッチングの聖地」として知られる自然の宝庫です。しかし、その魅力は多彩で興味尽きない豊かな物語を擁しています。市役所に石垣雅敏市長をお訪ねしました。

根室市のご出身で1976年に市役所に入り、2018年に市長に就任されました。市職員時代には多忙な職務の傍ら趣味の音楽を生かし、地域の文化活動を支えてこられたとか。

音楽好きは中学時代からで自己流でギターやピアノに親しみ、高校からはジャズやオーディオに夢中になりました。高校卒業後は東京の工学院大学専修学校に進んで土木を勉強し、根室に戻って市職員に。地籍係を皮切りに市内さまざまな部署で動きまわりましたが、比較的長かったのは総務課秘書係長の7年、そして2006年以後の助役(07年から副市長)です。

仕事の傍ら、趣味で培った音響の知識を生かすことができたのは幸いでした。例えば、根室が誇るジャズ同好会「ネムロ・ホット・ジャズ・クラブ」のコンサートの音響を担当したり、市の一大イベント「さんま祭り」や「かに祭り」を盛り上げようと照明・音響のボランティア団体をつくって応援したり、という具合です。

現在は自宅のオーディオシステムでジャズを中心に楽しんでいます。昨年末に

刊行されたオーディオ専門誌『季刊ステレオサウンド』(2024年冬号)に「ジャズの街・根室」の紹介とともに「根室オーディオ紀行」と題して私のコレクションに関する対談記事が掲載されました。これも根室の宣伝の一つになればと思っています。

演奏歴では市内唯一のビッグバンド「イースト・ポイント・ジャズ・オーケストラ」(1998年発足)の初代ピアニストを務めたり、ウッドベースでコンボ演奏に参加して楽しんでいた時期もあります。現在は、市立病院の忘年会で看護師さんたちにひやかされながら院長先生たちのカルテットに参加するのが数少ない発表の場ですね(笑)。



根室市公民館で録音された名鑑「根室ジャズ三部作」。1970年代当時録音されたもの。ジャズの街、根室を象徴する作品として今でもジャズ愛好家から親しまれているライブ録音。

根室の魅力の一つに、郷土史と呼ぶには壮大で国際性豊かな歴史があります。現在のまちづくりにも活かされているようですね。

根室港は18世紀末にロシアの遣日使節アダム・ラクスマンを、戦前には飛行家

世界水準の自然、美食、産業や歴史、文化という根室市の魅力を近隣エリアと連携して発信し、多くの旅人をお迎えしたい。そしてぜひ、北方領土問題も実感していただけたら。

dec Interview

いしがき まさとし

1951年根室市生まれ。工学院大学専修学校卒業。76年根室市役所入庁。総務部総務課秘書係長、水産経済部商工観光課長などを経て2004年水産経済部長、05年北方領土担当参事、06年総務部長、07～18年副市長。18年根室市長選に出馬して当選。現在2期目。趣味は高校時代以来のオーディオとジャズ。ピアノなどの演奏歴も豊富で、自作を含むオーディオ機器で名盤を楽しむ。

チャールズ・リンドバークを迎えるという歴史の舞台になりました。

井上靖の小説『おろしや国酔夢譚』にも描かれた大黒屋光太夫の物語は映画化もされ広く知られていますが、彼が嵐で漂着したロシア領からの帰還を熱心に支援したのがアダム・ラクスマンの父で博物学者のキリル(エリク)・ラクスマンでした。キリルの導きによりサンクトペテルブルグで女帝エカテリーナの謁見がかなった光太夫は9年半後に帰国を果たすのですが、それにロシアの使節団として同行したのが息子のアダムです。1792年のことで、ペリー来航の61年前でした。

使節団一行は根室港に浮かぶ弁天島に船を停泊させ、8カ月滞在して越冬生活を送るのですが、彼らの福利厚生施設とも言うべきものが「サウナ(蒸し風呂小屋)」でした。アイススケートも楽しみ、根室の役人には紅茶をふるまったという記録もあるので、「サウナ、スケート、紅茶の日本伝来の地は根室」と自負しています。

キリルの生地は現在のフィンランドのサヴォンリンナ市で、今年7月、その生誕記念式典への招待に応え、根室の若手経済人たちとサウナ文化の視察も兼ねて訪問してきました。サウナ文化をはじめ、ラクスマン父子との歴史的な縁を根室のまちづくりに生かしていきたいと思っています。

一方、チャールズ・リンドバークと妻のアンが乗る水上プロペラ機が米国アラスカから千島列島沿いの航路で根室港に着水したのは1931年で、同年竣工したばかりの根室公会堂で盛大な歓迎会が開かれています。公会堂はこのときに限らず根室の重要な歴史の舞台になった建造物ですが、

戦災を免れたにもかかわらず、70年代に当時の市の判断で取り壊されてしまいました。根室は空襲でまちの8割を焼失し、当時の面影があまり残っていないだけに、この上なく残念に思っています。今なら残せるのにと、市長を務める身としてまちづくりの教訓にしています。

戦後の根室市は北方領土問題と向き合う歴史を刻んできました。根室を訪れる人が学ぶべきことは多いと考えさせられます。

1945年8月15日に日本は終戦を迎えますが、その3日後にソ連は千島列島の最北部の占守島に上陸し、南下を続けて8月28日に北方領土に上陸。9月5日までに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島という四島すべてを占領しました。ソ連、現在のロシアに不法占拠された状態が今日まで79年も続いているのです。

終戦当時、北方四島には17,291人の島民が生活していましたが、全員が島を追われ、現在、存命の元島民は5,135人。平均年齢も89歳を超えています。択捉、国後、色丹の3島には日本人はいないものの廃村手続きがとられていない6つの村があるので、北海道は179市町村ではなく、正しくは185市町村なのですね。また、根室市にとって最も近い歯舞群島(最短は納沙布岬から3.7kmの貝殻島)は市の離島であり、行政区の一部です。だから、根室は市の一部をロシアに占拠されているまちでもあるのです。

根室市が「北方領土返還要求運動の原点の地」と呼ばれる理由には、歴史的に北方領土と一体になった社会

経済圏を形成していたことや元島民とその血を受け継ぐ市民が多いことがありますが、もう一つは、終戦間もない45年12月に当時の根室町長の安藤石典がGHQのマッカーサー元帥に「ソ連軍の占領は認められない」と陳情を行ったことです。これが「北方領土返還要求運動都道府県民会議」の各都道府県における設置の端緒となり、返還運動の気運を全国に広げていくことになりました。

根室市では「原点の地」として北方領土問題を市政の最重要課題に位置づけ、この問題を広く、正しく知ってもらうために、市内外でさまざまな啓発活動やイベント事業を展開しています。全国の中学・高校を対象にした「北方領土を目で見る運動」修学旅行誘致事業もその一つで、若い世代を中心に、一人でも多くの方にこの地を訪れ、北方領土を望んでいただきたいと思っています。

2022年2月のロシア軍のウクライナ侵攻で日ロ関係は厳しさを増し、北方領土返還運動は試練に立たされています。取り組みはどのようでしょうか。

近年の返還運動は中心を担う人の世代交代や後継者の育成が喫緊の課題になっており、そうしたなかで直面したのがロシア軍のウクライナ侵攻による影響でした。欧米諸国とともに経済制裁を行った日本をロシアは非友好国に指定し、対抗措置として①北方領土問題を含む平和条約締結交渉の中断、②ビザなし交流や自由訪問の停止、③北方四島での共同経済活動に関する対話からの離脱、を表明しました。

これによって長年積み重ねられてきた平和条約交渉をはじめ日ロ関係はその時計の針が大きく巻き戻され、元島民や私たち関係者を大いに落胆させました。そして何よりの懸念は事態の長期化で北方領土問題が置き去りにされ、国民の間に問題に対する関心が薄れていくのではないかと感じていました。

そうした危機感から昨年、市の独自事業としては54年ぶりに「北方領土返還要求キャラバン隊」を復活させまし



た。これは元島民らの派遣により道外で返還要求運動の啓発を行うもので、昨年は東京、愛知、滋賀、今年は宮崎、鹿児島を訪れて都県庁訪問や街頭での署名活動などを実施しました。今年、派遣したのは90歳前後の元島民3人と元島民4世の高校生などの後継者たちで、私も同行して返還運動にかける熱意を強く訴えてきました。

根室地方は酪農や漁業を中心に日本の食を支える食料生産基地ですが、第一次産業を取り巻く環境も一段と厳しくなっていますね。

酪農も水産もしっかり活性化を図り、生産空間としての役割を果たしていくことが、根室市の地域づくりの第一だと考えています。漁業では海洋環境の変化による主要魚種の不漁、資材や燃料価格の高騰があり、農畜産業も飼料や肥料など生産資材の高騰に見舞われ、生産基盤の整備促進がますます重要になっています。

漁業については従来、日ロ関係に左右されてきましたが、2014年のロシアのクルミア併合に対する日本の制裁への反応として16年にロシアの200カイリ排他的経済水域内におけるサケ・マス流し網漁業の操業が禁止されたことは大きな打撃でした。市内では水産加工や運輸、製缶などを含む関連の事業者がダメージを受け、年間約200億円の損失となっています。

こうした状況乗り越えようと力を入れ始めたのがホタテの沿岸漁業とトラウトサーモンの海面養殖です。トラウトサーモンは全国各地で養殖さ

れていますが、低水温を好むため、本州では冬養殖が一般的で春から初夏に出荷されるのを、冷涼な根室では夏に養殖して秋以降に出荷できるという強みを生かし、正月用のスモークサーモンへの加工など差別化を図っています。



トラウトサーモンの海面養殖

一方、ふるさと納税では長年、築いてきた水産物のブランド力や北方領土問題に対する応援などもあり、おかげさまで寄付金額は全国でもトップクラスで、4年連続で100億円を超える金額になっています(2023年度は全国6位で126億5千万円)。いただいた寄付は寄付者や市民の希望に合わせて目的別に基金を積み、地域づくりに充てることになります。行政は通常、単年度予算の事業執行を余儀なくされますが、ふるさと納税は基金を積み立てることで、長期展望で政策の実現を目指すことができます。そういう意味でも大変ありがたいですね。

観光にも注力している根室市には「知床ねむろ北太平洋シーニックバイウェイ」における広域的な観光振興のリード役が期待されています。

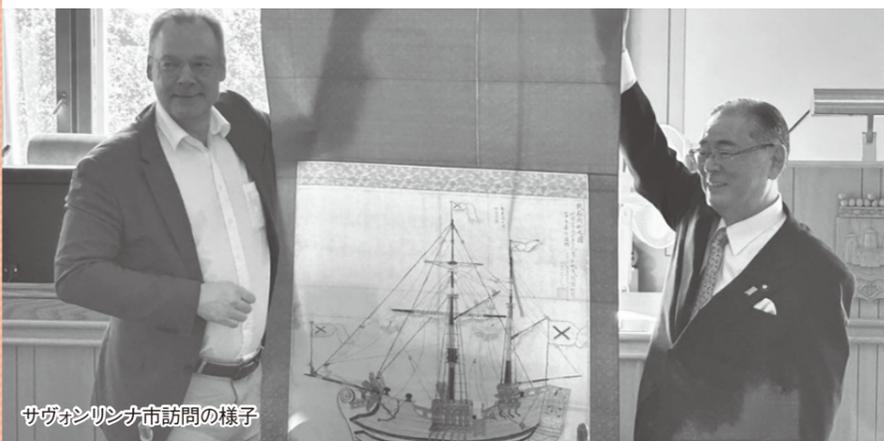
根室市は、特に「バードウォッチングの聖地」として国内外に知られています。日本で見られる野鳥の3分の2の370種類以上が観察でき、極東アジア地域でしか見られない「オオワシ、タンチョウ、シマフクロウ」という「ビッグ3」を目当てに欧米の野鳥愛好家も多く訪れています。市では野鳥観光の推進のために、毎年「ねむろバードランドフェスティバル」を開催したり、人の気配を感じさせずに野鳥を観察できる野鳥観察舎を民間設置を含め、市内7カ所に設けるなど取り組みを進めています。

また、今年度、市は総務省の「映像コンテンツを活用した地域情報発信実証事業」に応募して選定され、民間企業と共同して野鳥観光を中心とした観光PR動画の制作を行っているところで、今後、米国向けに情報発信することにより来訪者の動向の検証やさらなる誘客を図ることとしています。

「知床ねむろ北太平洋シーニックバイウェイ」は、世界自然遺産の知床と5つのラムサール条約湿地が含まれるなど国内ではまさに異次元の自然景観や多彩な地域資源が味わえるルートです。シーニックバイウェイの取り組みを通じて根室市が有する世界レベルの自然、食、産業や歴史、文化という地域の魅力を発信するとともに、近隣のエリアの方々と交流、連携を深めることでそれぞれの地域資源を最大限に生かし、エリア全体の経済効果を高めていきたいですね。

観光振興のためにも釧路以東の交通インフラの整備が課題ですが、間もなく道横断自動車道の阿寒ICから釧路西ICの開通が予定され、根室方面に延びる国道44号では尾幌米魚沢道路の整備促進が図られています。災害に強い地域づくりのためにも国や関係機関にはさらなるご支援をお願いしたいところです。

北太平洋シーサイドラインなど根釧地域の景観は多くのサイクリストを魅了しているようです。いつかぜひ、根室の納沙布岬から色丹島まで橋をかけて道路を延ばし、広島県と愛媛県を結ぶ「しまなみ海道」のように自転車や車で走り抜けることができたら。そういう夢を描いています。



サヴォンリンナ市訪問の様子

テーマ別分科会の振り返り

背景写真：札幌シーニックバイウェイ
藻岩山麓・定山溪ルート「秀逸な道」(無意根大橋)

各分科会ではルートからの話題提供の後、意見交換が行われ、それらをもとに「共に〇〇〇」というキーワードにまとめる流れで進められました。振り返りでは、各分科会のファシリテーターや話題提供を行ったルート代表者、アドバイザー会議委員の方々が分科会の成果を報告し、参加者全体で共有しました。

★ファシリテーター 芝崎 拓(dec)

小野さんの「秀逸な道カード・QRコード等を活用した地域情報発信」、松浦さんの「国道243号における白樺並木の景観整備事業」の話題提供をもとに議論しました。お二人の話から、活動継続のモチベーション維持は若い世代とつながることによる新しい視点の獲得や楽しさの共有がポイントであること、また「映画のワンシーンのような風景をつくる」ことが意欲の源泉になってきたことがわかりました。近畿地方整備局の方に北海道の景観に関する感想を聞いたり、景観について学んでいる札幌市立大学の学生さんにも意見を聞き、岩井委員からは景観づくりにマーケティングの視点も入れながら価値化していくことが今後は大事になるとのアドバイスをいただきました。

★小野 幸子氏 (支笏洞爺二セコルート代表)

続けていくためにはまず自分自身が楽しむこと、横の連絡をとりながら話し合いをしていくことが一番大事。小学生にろうそくのつくり方を教えたり、高校生と花植えをしたり、大学生と共に景観診断をしてきましたが、今後も若い世代とのつながりを大切にしていきたい。



それぞれの分科会の内容を共有し、今後の方向性をボードにして発表しました

★松浦 和浩氏 (東オホーツクシーニックバイウェイ副代表)

話題提供でも伝えなかったのは高校生との連携です。一昨年からのフォトコンテストや今年の白樺の撮影は高校生の協力が大きい。彼らの「楽しかった」というシンプルな言葉を大事にしたいと思います。

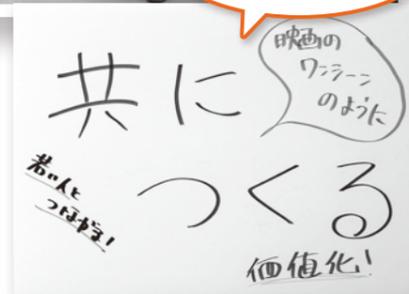
★岩井 宏文氏 (アドバイザー会議委員/樺GB産業化設計代表取締役)

活動を持続させるためのポイントや課題について意見交換するなかで、景観について捉え直しをする時期に来ているのではないかと感じました。景観を「道路を基盤とした舞台」と捉えると、そこには配役があり資金調達や松浦さんたちのような監督が必要になります。地域のな

テーマ1

シーニックバイウェイ 景観づくり

地域を美しく映し出す景観を、どのように守り、維持・活用するのかについて共有



全道ルート交流会議

2025年3月に20周年を迎える「シーニックバイウェイ北海道」。現在の指定ルートは15、候補ルートは2で、全道で約500団体とその関係者が活動を展開しています。その連携と交流を深めようと開催されているのが「全道ルート交流会議」。今年は道内外の約140名が札幌に集い、3つの分科会などで活動推進のための議論を活発に交わりました。〔2024年10月7日/札幌第一合同庁舎、TKP札幌駅前カンファレンスセンター/主催：シーニックバイウェイ北海道推進協議会〕

開会挨拶



シーニックバイウェイ北海道推進協議会副会長・北海道開発局長 坂場 武彦氏

シーニックバイウェイ北海道の活動に取り組んでおられる皆様にあらためて敬意を表します。第9期北海道総合開発計画では、官民の垣根を越えて多様な主体が地域の課題解決に向けて連携、協働する「共創」の取り組みを推進しています。今回の会議では各ルート活動団体をはじめアドバイザー会議委員、包括連携協定を結ぶ企業・団体、また道内の大学生や近畿と中国の地方整備局の皆様にも参加いただき、活動の裾野を広げるかたちでの開催となりました。皆様にとって有意義な機会になることを祈念しています。

話題提供



シーニックバイウェイ北海道の最近の活動状況

本局建設部 道路計画課課長 村上 陸氏

プログラム

- ★01:開会
- ★02:話題提供 シーニックバイウェイ北海道の最近の活動状況
- ★03:テーマ別分科会
 - ①シーニックバイウェイ×景観づくり
 - ②シーニックバイウェイ×地域づくり
 - ③シーニックバイウェイ×観光空間づくり
- ★04:振り返り
- ★05:包括連携企業等とのマッチング/フリータイム
- ★06:閉会



テーマ2

地域づくり シーニックバイウェイ

地域づくりのあり方等を共有 活カある地域の継続・発展を目的として、

★ファシリテーター 小西 信義 (dec) 西さんの話題提供「流雪溝活性化プロジェクト」では、人口減少下で地域づくりするためには企業を含め多様な立場との連携が不可欠だが、その進め方が難しい、との問題提起がありました。また、北海道コカ・コーラの砂山さんの話題提供では、企業として社会的使命を全うしたいが地域ニーズをくみ取るとは簡単ではない、という社会貢献活動のジレンマが示されました。

そこで対話を深めていくことの重要性を軸に議論を進めました。北海道コカ・コーラさんは道内に営業所など地域拠点が多数あり、そこには、前例もあるように地域との連携に長けた方が少なからずおられるとのこと。今後はそういう方々との連携を積極的に図ったら

どうか、と山岸委員からアドバイスがありました。属人的な面もあるけれど、それによって対話が生まれ、次の連携が生まれるということで、そのベースとして「共に夢を見る」ことが大切、との山岸委員の指摘でキーワードをまとめました。

★西 大志氏 (萌える天北オロロンルート代表) われわれのルートは小さな自治体が多く、地域の人々はまちづくりの多様な役割を掛け持ちして疲れているのが実情です。そこを北海道コカ・コーラさんが清掃活動などで支援くださって来ました。今後は地域の側が同社に対して何が出来るかを考える必要があると思っています。活動を通じて地域、企業が共に良くなっていくように取り組んでいきたい。

★砂山 達郎氏 (北海道コカ・コーラボトリング(株) カスタマーマーケティング)



「コカ・コーラ」は世界的ブランドですが、弊社は今年61年目の道産子企業です。「北の大地とともに」というスローガンで2003年ごろから営業拠点や物流網を活用して地域貢献活動を行ってきました。ある一人の社員の取り組みが地域での活動展開を広げるきっかけとなりましたが、今後さらに社員団結して地域を盛り上げていきたいと思っています。

★山岸 奈津子氏 (アドバイザー会議委員/(一社)SHIRAOI PROJECTS代表理事)

広域連携にしても次世代への継承にしても「共に夢を見る」ことが大事ではないかと思いました。「地域は企業に対して半歩リードし、こうなったらいいという希望を企業に投げかけるスタンスだとうまくいくのではないかと分科会後、西さんと話し合いました。

テーマ3

観光空間づくり シーニックバイウェイ

魅力ある観光空間づくりを 目的として、シーニックらしい 観光のあり方について共有

★ファシリテーター 佐藤 真人 (dec) 「エコ・モビリティ」の活動を中心に栗原さんと田中さんから報告いただきました。田中さんの知床ねむろ北太平洋の取り組みはまだこれからというところがあるようですが、天塩川の取り組みは長く、事業化も進んで根付いてきている様子です。旅のスタイルやモビリティの多様化について議論を進め、フロアの各ルート関係者からも現状を聞きました。

木村委員から、各地域で自然の楽しみ方についてさまざまな取り組みが行われているものの「観光空間づくり」としてはまだ掘り下げる余地ありとの指摘がありました。まとめのキーワードとしてファシリテーターから「冒険」を提案しましたが、木村委員からルートの域内、あるいはルート間で連携できる場所を探しながら進むという意味で、空間の広がりを感じられる「探険」という言葉の提



案があり、まとめとしました。

★田中 恭平氏 (知床ねむろ北太平洋シーニックバイウェイ) 今回の交流会議は若手としてさまざまな情報に触れて勉強になり、あらためて地域のことを自分ではわかっていないと実感しました。この思いを今後の地元の活動に生かしていきたいと思っています。

★栗原 智博氏 (天塩川シーニックバイウェイ代表)

旭川・稚内間のサイクルイベント「てっぺん・ライド」に長年取り組んできましたが、この地域にはまだまだ新しい発見があり、「共に探険する」にふさわしい発展途上の地域だと思います。現在、年間を通じた観光づくりに取り組もうと上川地域のスキー場の共通シーズン券の発行を計画しており、合宿やスポーツ大会の誘致についても近隣市町村で連携し、交流人口の増加に取り組んでいます。

共に 探険 する

★木村 宏氏 (アドバイザー会議委員/北海道大学観光学 高等研究センター教授)

自分たちのルートだけでなく隣のルートとつながることで新しい観光空間づくりができるのではないかと話し合いました。ルートが互いによく知り合ってこそ、それぞれの魅力を打ち出した情報発信ができるのであり、そういう意味で周辺の地域を探険することが大事で、それをキーワードとしました。観光地域づくりは一つのブランドをつくっていくことであり、シーニックバイウェイのブランド力を見直し、今後もっと探険することが必要だと思います。 文責:dec

企業とのマッチング



共に 夢を見る

全道のルート関係者と包括連携協定企業等との交流促進を図ろうと、ポスターセッション方式による交流タイムが設けられました。今回参加の包括連携協定企業等は9団体。全体会議で団体の代表者が各1分程度、支援方策についてスピーチした後、各団体のポスター前に分かれてルート関係者と自由歓談し、交流を深めました。

【参加団体】(一社)北海道商工会議所連合会、林野庁北海道森林管理局、東日本高速道路(株)北海道支社、北海道コカ・コーラボトリング株式会社、北海道地区「道の駅」連絡会、クリプトン・フューチャー・メディア(株)、特定非営利活動法人北海道遺産協議会、北海道エネルギー(株)、(株)ACT NOW